

やエリアーデの理論も無雑作に利用できるのではなく、範囲を限定しつつ、かれらの方法の本質をたえず顧慮しつつ使用しなければ過誤を犯すだろうという気がした。

わたしの方法はたいへん素朴だ。詩はことばを組合せて作るのだから、ひとつひとつのことばと、その組み合わせがたゞなるべくていねいに分析してみる、ということに尽きる。ことばもまた幻想で、それが自己幻想や対幻想に引っぱられて着色したり共同幻想にひっぱられて褪色したり……といったことがあって、その分析はおおむねつねに難澁をきわめ、その結果もはなはだ見解のせめことだが、わたしにはそのほうが心安く、そうしてそれが「蘇小小の△死▽に対する反抗」という李賀のテーマにわたしを導いた。

「蘇小小歌」をこのような形で解こうと思つた。この口夢にもなく、解けようとも思わなかつた。これが満足の解法とはいえず、まして人々が遠い将来にもこれに賛同されるかどうかは、まったくわからぬことである。発刊当時には考えもしなかつたが、あるとき「蘇小小歌」が解けたらそれをしおにやめようかと思つた。いまわたしは手習というわたしには勝ちすぎた荷を下したい気がしきりにする。

だが「蘇小小歌」に見出だしたとわたしの幻想する「死に対する反抗」というテーマを李賀の他の諸作についても験算する仕事は幻想者たるわたしのやるほかはない罰であるう。わたしは罰から逃れずば仕事をしなければならぬだろう。娑婆世界のほかに淨土を覗いてはならぬという一種の共同幻想を共同幻想としてではなく自己幻想としておのれの夢の中心にすえてある奇妙な現象としてのわたしには、あるいは当然のことであるかもしれない。

ちかごろ、大学で卒業論文あるいは修士・博士論文に李賀をとりあげる人が多くなつたらしく、それらの人で懇合の手紙をくださる方がときときある。そのひとりの〇君に一九七五年十月二十六日付て出した手紙を少し修正し、これを不特定多数の同好の学生 L 君への手紙としたい。

お手紙を拝見しました。李賀をおやりになる由、大いに期待します。論文を書くために李賀を送ぶ、というより、李賀を読んでいるうちに翻訳や論文ができてしまった、というほうが、わたしとしては好きなのですが、どういふはいい方をしようと思つるに李賀の真実がよりよくつかめたらいいということになりましょう。

まず、賀の詩そのものをよく読んで、その中でもっと自分をひきつける作品を一つ選び、その詩がなぜひきつけるのかを、自分の内部と外部、李賀の詩の内部と周辺について、かれの他の作品を参照しながら精査し、それを論文の形にまとめられるといいのではないか、と思います。先人の意見は、いちおう、すべて疑つて、あなた自身の読み得たものを核とし、その核が李賀の作品のすべてに妥当するかどうかを、できるかぎり検討するのです。他の人の注釈や研究は、そののちにごらんになるのがいいでしょう。

おたずねのわたしの古い翻訳や論文の多くは気にいらなくなつていきます。訂正するには全部を書き直すほかになく、そのいとまがなかなかありません。

『幽飲集』と『方向』の旧号は品切れです。京都女子大学発行『人文論議』にのせた李賀論は

「長歌統短歌」(7)「金銅仙人詩漢歌」(8)「楞伽」(14)「馮小橋」(15)「負薪」(16)「杜序」(17)「樞公」(18)でこれ旧号もたいてい品切れのようですが、文学部のある大学とは雑誌交換をやっているようですから、あなたの大学の図書館にすではいっているかもしれない。論説資料保存会「中国関係論説資料」は中国関係講座をもつ大学ならそなえていると思いますが、そこに「楞伽」以下の五篇が影印縮入されています。(李肇に少し触れた拙稿「宝塔」
「李肇伝論」花園大学研究紀要別刊号所収も)

このほか「李肇研究」というガリバン個人雑誌を発行、朋友書店で売ってもらっています。品切れしか刷らないのですぐ品切れになります。

さきにも申しましたように、わたしの作業もあなたにと、ては、先人の意見の一つにすぎません。あなたが論文を書き終ってから参照なさる程度のほうがよいのではないかと思えます。わたしは自分の作業に半分の自信と半分の疑問をもっています。あなたが若い研究者がわたしの半分の自信をもちろなく、言葉で新鮮な作業を進めてくださることを念願しています。

△雑記 92 V 李 肇 像

1975.12.19

一八七五年八月八日付で方向社編集長あての次のような手紙をうけた。

……二 三日雷雨があり、もう立秋となりました。北原白秋の名は白秋、まるで李肇の秋のようです。／今日は、又妙なものを売り込みに参りました。十月に出る「李肇研究」に向けて、「李肇像」瓶」という題のエンピツデッサンのコピーを送ります。／これがもし「李肇研究」の編集方針の邪魔にならず、かつ、まあ、見れる絵だとしたら、私は、急いで、李

學研究に必要な分だけ……コピーして送りたいと思うのです。／「没」でももちろんいいのです。「没」でも……ちょっと見ていただきましたら気が済むと言ふものです。／いきなり「李賀研究」に絵がはいったら読者が怒り出すかも知れません。／……／これは二月製作の分で、その時の走り書きは次の如くです。

ひとくエロティックな瓷瓶の習作

不安定な傾き、

口のせまさはわいせつである

更にくびれの三本のみぞは異様としか思えな

只 李賀の為に

でも最近バックに「呑む女」を書き加えました。最終的にコピーする時は題もコピーにはいるようにしようと思っております。／でも、本当に「没」でも、かまいません。何しろ詩画集なんてもので遊んでいるのですから、李賀研究を邪魔しに来た雷と同じです。／……

差出人は江綺娜さんである。この手紙を受けとったところ、「蘇小小歌」をとりあげようと思いつきながら決心がつかず、わたしの前に立ちふさがる問題の前で、逃げ出す口実はかりさがしていた。その「不安定な傾き」が、江さんの△壺▽には、わたしの内部より清楚に插かれてある、と思つた。蘇小小という「エロティックな瓷瓶」の内面の暗い風雨に迫るためには「わいせつ」な「せま」い「口」からはいってほくしがあるまい。蘇小小にとってのあるいは李賀にとっての「異様」としか思えぬ。「くびれの三本のみぞ」とは何か。

江さんはもとよりわたしが『李璣研究』第十三号で蘇小小を取りあげようと考えていることなどは知らない。まったくの偶然だが、中国の女性の絵と走筆詩が、『李璣研究』の執筆者としてのわたしにはなく、編纂者としてのわたしに送られて来たことは、二重のほげましであった。

外部の編纂者には締め切りの時間でいふとも迷惑をかけたことのないわたしも、方向社のそれには迷惑をかげづめで、このたびもそのようにはほげましをうけながら、予定より二ヵ月もおくれた。考えの進まぬときにはツルハシを振り鋸をとり土を掘り石を動かすのがいい。土は掘れ石は動いたが、考えは進まず、小さな愛は「今秋不似云秋」となつたが荒蕪した胸中は「今秋似去秋」で、江さんに送ってもらつた原画はコピーができたのちも返送しもしせずに、夫礼をかさねながらそれでもとうやら年内発行にまで漕ぎつけた。

十二月十七日、ひまぐり遍訪された草森伸一氏から井上洋介作「李璣像」を恵まれた。像は荒れた庭に笠をかぶって坐る李璣で筆のかわりは「莫種樹」の詩が書いてある。

「画家その人の顔になるんですよ、李璣を描いてもらうと、もっともこれは井上さんには似てないけれど」

そのことばに、このものの絵本にのつた写眞を家人がもつて来たので見ると、井上氏のおもかげが、たしかにうつっている。似るとは何か、似ぬとは何か。

「李璣が二十歳で死んだことによく知ってるし、詩も読んでるんですけど、描くときどうしても老人になつちゃうんだそうですよ。」

回幅のうちの一枚をながを見ずに抜いてきたということだが「莫種樹」があつたのは、いま

のわたしにはびびったりで、老衰したその像は、李賀の写眞というよりは、少年李賀の詩の前で、おのれの生を生きること忘れて茫然と「六十未有五十余」の現在をながめるわたしの姿とも見えなくはない。江さんの畫が中国の画家の描いたいかなる肖像よりも「蘇小歌」を作ったときの李賀に似ているとすれば、荒蕪の川景を広く老畫生を提出した井上氏は日本の画家の描いたいかなる肖像よりも「真檀樹」を作ったときの李賀に似ている像を創出したといえるだろう。

ふりかえてみると、わたしは絵と口になにかということ正面きって考えなかった。教師として「文学」という教課をもたされ、そこで文学と口になにかという問いの前に立ち、苦しまぎれにある答えをつくってそれを語ってきた。ほかの人たちはどんな答えを出しているのかといういろ

読んだが、漏れる例外をのこりなく包みうる理論にぶつからなかった。

李賀の面貌はかれの詩のように見る人、場所、時間によつて違つて見えただろう。かれを唯美主義詩人といふ法家詩人というのを見る人の立つ場所や時間とかかわりがあるう。李賀も変化し見る側も変化する。絶対にこうだともいえず絶対にこうでないともいえず。しかもそのような無常の諸行のなかの一つとしてことばがあり、ことばの組み合わせがあり、それを無常とあなど、ていさなことばひとつを蹴とばしたら、無常の諸行の一つにすぎぬ生爪が斜けて、ううムとうめかねばならぬ。その痛みはどこから来るのか。その痛みはなぜ生爪を落したわが身にあつて落ちた生爪にはないのか。いやまた、生爪にはたして痛みはないのか。わが身の痛みをせせら笑う傍観者が出て見せろといつても出して見せることができぬように、生爪の痛みがわが目の前に姿を見せぬだけで、生爪はわが身が覺えたよりも割しい痛みを耐えて沈黙しているのではないのか。

その沈黙を振りおこす文字がもしあるとするならば、わたしはそれを文学とよびたい。いや、別に文学とよぶこともいらぬ。それもことばで幻にすぎぬ。来た痛みは去る。どこへ・幻のわたしは際限なく問いながら、答えを見出すこともなく、痛みの中で痛みを忘れ、何を問うているのかを忘れて、やがて去るのであるう、どこへ。

正 誤 (68頁までのものは65頁)

64 16 百楽天↓白樂天 67 4 など↓など 6 3 黒↓暗黒 14 黒↓暗黒 69

2 勞せず↓勞せず 74 3 思いか↓思いが 80 11 佐伯 聞きて↓佐伯侯聞きて

後 記

『李賀研究』を訓刊して五年たった。小さな硯の水けいつも廻れそつだが、心温い読者が、直接に間接に声援してくださった。その功まじにこたえるところはどのことばでできないが、一滴でも二滴でもしぼり出せるものはしぼり出しておきたい。物価がとんとんあがり、それが微小な雑誌の発行に直撃する。郵便料の値げを思うと、その分ぐらいは材料代で工夫ができればかとおれ、れ算段したが、け、きよくどうにもならぬ。面倒なばかりのこの雑誌の販売をいやな顔ひとつ見せず引受けられる朋友書匠のみなさんにも感謝する。

この書を幽明画界のはざまにさまよう女性たちならびに幽蘭水子に捧げる。

(一九七五年十二月二十一日月午)